

# あぶら通信

第14号 1993年10月20日

あぶらむの会発行

〒509-41 岐阜県吉城郡国府町宇津江

TEL 057772-4219



沖繩の海

愛楽園 上原英一氏作

飛驒だより

今年の夏はどこへ行ったのでしょうか。天の底が抜けたような雨、雨、雨ばかりの毎日に、うんざりを通り越して、何か不安な気持ちになってきます。今日も台風14号による大雨で警報の発令、子供たちは学校が休みと大喜び、私は異常出水に備え自宅待機、この時とばかりに期日をとくに過ぎた原稿書きにペンを走らせています。

あぶらむ通信を手にとされている皆様には、お元気で過ごしのことと思います。前号よりアツという間に6ヶ月、時のたつあまりもの速さに唖然としています。

都会で生活していた時はあまり関心を寄せなかった天候ですが、田舎生活では日々の天気に一喜一憂しています。しかし、今年の低温、長雨は尋常ではなく、あぶらむの農作物も被害をうけています。何か、大きな自然災害の前兆でないことを祈っています。



昨年、6反の田で2400kgの米を収穫、そ 富田桂さん 懸命に田植え前のしろかきですの半分を「食管法」違反承知の上で一部会員の方々に販売しました。食味もさることながら、無農薬の安全な米をと、スタッフ一同力を合わせてきました。昨今は実に不思議な時代で、地主から田を借りても年貢米を納める必要がなくなりました。米をつくっても採算がとれず、しかし先祖からのものを荒すわけにもゆかず、誰か代りにやってくれる人がおればありがたいということになるのです。この一事をみても日本の農業の置かれている現状が理解できると思います。おかげ様で今年は約一町歩の田を耕す大百姓となりました。しかし、一口に一町歩の田といっても、これだけの田をつくるということは大変な仕事量です。おまけに今年は「完全無農薬」ということで、除草剤の使用もやめたため、除草にかかる手間たるや大変なものとなりました。大人3人で40日間ほど除草作業に費したでしょうか。農業担当の谷さん始め他のスタッフの労たるや大変なものでした。私たちはこれまで田植時に除草剤を一度だけ使用し、農薬は一切用いずにきました。自然環境の保全、他の生物との共存、そして我々自身の健康問題等を考えると農薬などは決してよいものではありません。しかしそれを一度拒否すれば収穫は半減、ひっくりかえるほどの労働量、それらをおしてまでも完全無農薬に徹するということは、それはもはや「使命感」の領域に入るような気がします。「除草剤を使わなかったおかげで、今年うちの田にホタルが沢山出てうれしいネ」、そうやってスタッフの谷さんは自分の苦労を吹きとばしていますが、しかし、それは私たちアマチュア農業だからできる

こと、云えることであって、米づくりで生計をたてている人にとってはそんな呑気なことはいえないと思います。これまで安易に「無農薬」とっていた私ですが、自分たちで田を耕してみ始めて肌で感じとった理想と現実の相剋、ネット裏で「農薬は悪だ」と論じている自分、しかし他方、グラウンドでプレーしてみて口ごもるもう一人の自分、解決の糸口はどこにあるのでしょうか。来年は農薬こそこれまで同様用いないが、一回だけは除草剤の力を借りようと思っています。(心苦しいですネ)

6月18日、昨年に引き続き沖縄のハンセン病療養所「愛楽園」より16名の皆さんをお迎えした。今年は沖縄の伝統芸能を通して、地元との交流を計画した。そして、丹生川村社会福祉協議会の多大なご尽力で実現の運びとなった。

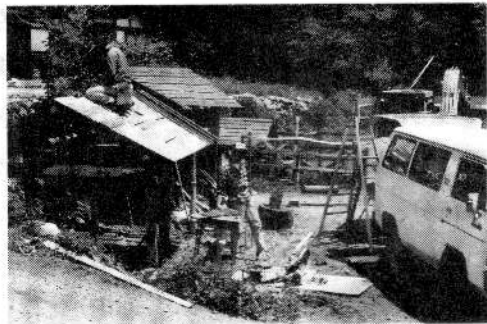
しかし、直前になって村内からハ病に対する不安の声がおこり、その解決として同病を正しく理解するための講演会をもつことになった。村内各層の代表の方々60名ほどの参加があり熱心に聞いていただいた。

質疑も終り帰宅の準備をしていた時、若いお母さんが話しかけてきた。「今回、私はボランティアとしてお手伝いしたいと思っている。しかし、私には2才半の子供がいます。田舎の主婦は子供を年寄りにあずけてくるというわけにはいきません。子供を連れてきてご迷惑ではないでしょうか」、そう語るその人の目は真剣だった。ハンセン病はうつるような病気ではない。それに入園者の大多数は菌の活動が停止している。だがしかし「万分一」ということもある。子供にもしものことがあったらというお母さんの気持が痛いほどよく伝わってきた。「大丈夫ですヨ。一緒に連れていらして下さい」。私の言葉にその若いお母さんははっきりと決心されたようだった。わずかなやりとりだったが、それは私にとってとても貴重な体験だった。

「ハ病のことはよくわかった。うつるような病気ではないことも。だがしかし……」、私たちは未知のものに対して、また自分に対して不利益を与えると予想されるものに対して、この「だがしかし」をもって自分の身を守りたがる傾向があるのではないのでしょうか。私達のそのような行為によって、多くの人々が傷つき、苦悩の中に生きざるを得ないことを知っていても、仲々自分を一步新しい世界に向けて踏み出せないのが現実です。ものごとを正しく理解するということは、その正しい知識に向けて自らに決断を促すこと、また相手へのおもいや愛故に、どれだけ自分自身を変えて行くのかということ、私はこの若いお母さんから教えられたように思いました。

このようなこともあってか、「沖縄の祈り、風にのって」と題された芸能交流会は、豊かな心の通いあいを私たちに与えてくれました。

さて、宿ができて満3才を迎えようとしているあぶらむです。現在、昨年に引き続き日本青年奉仕協会から派遣されてくる一年間ボランティアを加え3名のスタッフと、私たち夫婦とで全体を切り盛りしています。木工作業場を改築したスタッフハウスも出来上り、徐々にではあるが里らしくなってきました。



ニワトリの小屋づくり

これまででは、里の建設と自活のためにエネルギーを注いできましたが、これからは「旅人育て」のためのプログラムづくりを進めて行きたいと思っています。その第一弾は、念願であった「黙想会」です。ヨーガ教師の塩沢賢一さん、真言宗飛驒千光寺の大下大圓さん、そして私との三人で「声なき声を聴く」をテーマに、各々の分野における黙想や瞑想の精神や技術を持ち寄って組み立ててみたいと考えています。どんな内容になるやら、これから機会を得て多くの分野の人々と協働して、「旅人育て」のプログラムを催して行きたいと思っています。また、これも念願であった「あぶらむの宿」のパンフレットが出来上がりました。この宿の特徴を仲々言葉で表現できなくて悩んでいたのですが、西平直さんのご協力です。やっと納得のいく宿の案内が出来上がりました。必要として下さる人々に多く利用されることを願っています。

この長雨は当分続くのでしょうか。このまま冬に突入すれば、今年は大雪になってしまいそうです。地球規模で異常気象、これも自然の一部なのですね。

短い秋の飛驒地、薪積みなどもう冬の準備が始まりました。これからの一時、新米やなめこなど秋の山菜で私たちは秋の一時を楽しみます。よかったら一緒にお過ごし下さいませ。皆様のご健康をお祈りいたします。

1993年9月20日

大郷 博

## 飛驒－沖縄愛楽園交流記 Part II

昨年の沖縄愛楽園の方々と飛驒の方々との相互交流は、お互いの心に深い感動を刻み込みました。そして今年もまた、愛楽園の方々が飛驒の地を訪問されました。滞在中、昨年も訪れた和光老人ホームに加え、今年は新たに丹生川村の方々とも交流の時をもちました。「飛驒だより」にもありましたように、丹生川村では受入れにあたって村の方々の中に不安もあったようです。その話を聞いた一人の村の障害者の青年が、今回ボランティアとして愛楽園の人々の受け入れに協力して下さった人々に向け励ましのメッセージを寄せてくれました。青年は交通事故で動かなくなった手の代わりに、口で棒を噛み、その棒でワープロをたたき原稿をうってくれました。

そこで今回、その青年のメッセージと訪問団の団長をつとめられた愛楽園の松岡和夫さんが滞在中詠まれた短歌を紹介させていただくことにしました。



### 「生の声・・・」

鴻巣新作

初めまして・・・

私は先月25歳になったばかりなのですが、19歳を迎える春、出勤途中に自らスピードのだし過ぎでハンドル操作を誤り、ガードレールに追突、その事故で首の骨を骨折し、その瞬間から両手両足の機能を含め、それまで体ぜんぶで感じていた感覚、



痛い・かゆい・熱い・冷たい

と感じる機能も、すべてを一瞬にして失いました。つまり、その日から二度と歩く事のない生活、食事も、用を足すことも、身の周りの事全て、自分で自分の事が何一つとして出来ない生活、寝たきりの生活が始まりました。

そして、それまで生活してきた18年間とは、物の見方や考え方が180度変わりました。

事故から4年と少し、病院でリハビリ生活を送り、ちょうど3年前の6月に退院、退院と同時に村の福祉センターの皆さんのお世話になり始めました。

又、正直なところ丹生川村にも福祉センターがあるとは聞いていましたが、場所はどこにあるのか、どの様な福祉活動を試みえるのか、又、どんな人達がお世話をしてくれるのだろうか、とにかく知らない事ばかりでとても不安でした。

でも、実際に福祉センターに来てみて感じたことは、建物が想像していたより明るくて、想像以上に広がったことに驚きました。

そして実際に入浴サービスを受けてみて感じたことは、入院中もリハビリの為の浴槽に入っていましたが、体や頭は洗えませんでした。でも、ここでは私一人のために四人もの人がつき、体を洗ってくれたり、髪の毛を切ってくれたり、爪切り、耳かきと、とにかく全てやってくれるのです。

そして初めて福祉センターに来たとき、何よりいちばん最初に不安を無くしてくれたものは、福祉センターの人達の笑顔でした。

初めて会う人達、そしてこれから先ずっとお世話してくれる人達が、とても優しい笑顔で迎えてくれた事がいちばん嬉しかったのです。

また、私は高校卒業までの18年の生活の中で、障害者と呼ばれている人達の気持ちがどんなものなのか考えたことがありませんでした。

でも、何時しか自分自身が障害者と呼ばれるようになり、いちばん恐かった事は人前に出ることでした。

病院の中などで移動はまだ良かったのですが、リハビリなどで車椅子に乗り外へ出たときにすれ違う人達の視線の冷たいこと。せめて横目でみるぐらいならまだしも、立ち止まり、何か珍しい物でも見るような視線、偏見の眼差し、そして初めて味わう恐怖感。

「いったい私がお人達に何をしたと言うのでしょうか。」

偏見の眼差しとは、無意識のうちに誰かの心を脅かし、誰かの心に傷をつけ、誰かの心を閉ざすものだ、私はそう感じました。

しかし、私も障害者となる以前、誰かの心に傷をつけていたかも知れないのです。そして実際に私自身が両方の立場を経験して思うことは、そういった視線は無意識のうちに、そして見ている人すべての視線が偏見の眼差しだとは限りません。そして見られている人達も、視線を感じたからといって、「自分は哀れみを受けている」などと決めつけてはいけません。

そして見えない傷とは、日常生活の中でも形や内容が違っただけで、誰もが無意識のうちに傷つけ、又、傷ついているものなのかも知れません。

ただ、私たち障害者の見えない傷とは、多種多様、そして大小異なる傷が心と体の両方にあるため、皆さんが思ってみえるそれ以上にとっても敏感になっているのだと思います。

でも、傷ついた人たち誰もが求めている物は、きっと同じものではないでしょうか…？

## ハンセン病について少し

私がハンセン病についてどれだけの知識があるのかと言えば、福祉の方から話を聞き、そしてハンセン病についての資料を頂いて、それを読んだだけなので、いま現在知っている事は、名前の由来・完全に治る病気、それとあと少しの知識、いまはこれぐらいなのです。

また、頂いた資料を障害の内容は全然違いますが、同じ障害者と呼ばれる立場の私を読んで、二つの項目が目についたので、どう目についたのか簡単に書きます。

【ハンセン病を病んだ人に温かい手を】という項目の最後の所に、「社会復帰の出来ないこのような人々に、温かい手を差しのべて、少しでも療養所の生活が明るくなるよう、少しでも幸せであり楽しいものであるように、皆さんのご協力を心から願います。」と書かれていましたが、私にとって温かい手とは、福祉センターの皆さんはもちろんのこと、日常生活の中に沢山あります。

例えば、郵便配達の人達は、郵便物が少なく時間があるときなど、私の部屋の窓の所まで直接持ってきてくれ、僅かな時間ですが話し相手になってくれます。近所の人達も、近くを通るたびに一言かけてくれ、そして温かい笑顔を残していってくれます。

そして友達や知人は、仕事などで国道や村道を通るとき、クラクションを鳴らしていってくれたり、パッシングをしていってくれたり、顔や体は見えませんが気持ちや

優しさは十分届きます。

これら日常生活での一つ一つが、私に勇気と活力をくれ、これら一つ一つが、私にとって大きなボランティアなのです。

そして日常生活の中で、私を取り囲む人達の笑顔、偽りの無い笑顔、ごく普通の笑顔、これがいちばん温かい手なのです。

**【ハンセン病は直る病気です】**この項目の途中と最後に、「ハンセン病療養所が設立されて百年になりますが、そこで働いていた職員でハンセン病になった人は一人もなく、どんなに感染しにくい病気かが実証されています。・・・1943年にスルフォニルアミドがハンセン病に使用されてからは、完全に直る病気になりました。」

この項目について私は、正直まだ勉強不足で何も言える資格などありません。

でも、一つだけ個人的な意見を聞いて欲しいのです。

どんな病気にしても成りたくてなった人などいないと思います。そして治る病気なら誰もが1日でも速く治りたい。又、速く治してあげたい。

予防できる病気なら誰もが予防するでしょう。

でも、いざ予防をしようとしても、一つ一つの病気に対してどの様に予防をしたらよいか、ある程度その病気について自分で学ばなければ、又、知識ある人から教えてもらわなければ予防は出来ません。

また、世の中にはまちがった知識で予防している人達がいることも事実でしょう。

もし、そういった古い概念、まちがった知識で病気を予防している人達が皆さんの身近にいたときは、是非、皆さんが持っている正しい知識を、その人達に教えてあげて欲しいと思うのです。

こういったことも、一つのボランティアなのではないでしょうか。

最後まで聞いてくれて、どうも有り難うございました。

皆さんのボランティア活動を応援しています。

頑張ってください・・・。

鴻 巢 新 作

THANK YOU・・・by Shinsaku

P.S. 牧上君、上手く書けなくてごめ～んね。



# 飛驒の地に

松岡和夫

百年前の合家建てたる大郷師に招かれて我ら奥飛驒に来ぬ

若葉萌ゆる四十八滝を仰ぎおれば奥飛驒に来し思い湧き来る

田草取りし頃思いつつ風になびく飛驒の田ん圃の稲を見ており

沖繩の療園より来し吾が手とりて飛驒の媼は踊りたまいぬ

昼食に招かれし飛驒の君が庭のツツチは梅雨にぬれて咲きおり

乗鞍岳の万年雪に冷したるビールを君と乾杯して飲む

六月も冷たき乗鞍岳に来て柔らかき芽を出す這い松を撫ず

町長の奥様のお茶もうまかりき飛驒の情の心にしみて

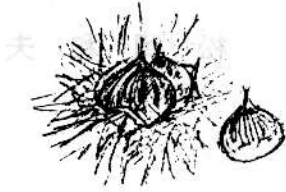
来年もこいよてう飛驒の住職の優しき便りに涙こみあぐ



飛驒の人ら迎えて共に夕餉しぬ旧知の如く語り合いつつ

交流終え帰るさにわれらの肩抱きぬ飛驒より来ませし優しき人らは

(上の二首は大郷師らが昨年10月に来られた際の作品)



## 「癒しの手」づくりをめざして

大山直子（鍼灸師）

人は本当にどんどん変化してゆきます。

私は鍼灸師（しんきゅうし）です。鍼（ハリ）や灸、または手技といった治療手段を用い、その向いあう相手の身体の状態が、どのように変わっていったかということを見つめ毎日悩みながら、かつ、面白がりながら仕事をしています。

大学を卒業後、私は、ある銀行系のコンピューターシステム開発の会社へシステム・エンジニアをめざして就職しました。

「〇〇になりたい。」という、何かコレという職業が大学四年間で見つけれなかった私は、一般企業に新卒として入社できるのは大学を出たばかりのこの時しかないと思ったのと、せっかくなら何か技術を身につけられる仕事が良いのではないかと思いを検討した仕事でした。

しかし、自分の性質上、緻密さや根気がなかったことや、数字とは、高校時代に仲たがいをして以来、就職後も関係の修復が難しかったりと、入社一年後には、早くも仕事に挫折し、他の自分に合った仕事を捜したいと願っていました。そして、出来れば、自分のやっている事が、もっと単純に、何の役に立っているのか感じられるような仕事を見つけたいと考えていました。

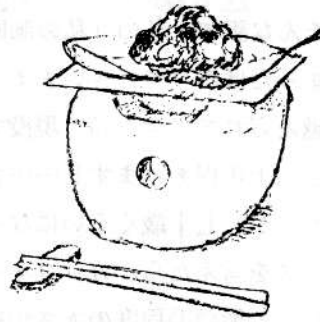
そんな時期、知り合いの女性の顔面神経麻痺が、鍼を受けて治ったという話を聞いたり、他の友人や知人が、腰痛や肩こりなどで、鍼灸の治療を受けているという話を聞いて、世の中には、鍼灸師という職業があったのだということ、この時期はじめて「知った」ように思います。そして、この「知った」時点で、自分は、鍼灸師になるということを決めていたような、今思うとそんな気がします。

鍼灸師というものになるためには、その養成のための専門学校があり、その課程を終了しないと、鍼灸師の資格を得るための国家試験を受けられません。

そこで、私も、システム開発会社を二年で退職し、都内に数ヶ所あるうちのひとつの学校に入学しました。そこでは、解剖、生理、病理学などの現代医学の基礎知識と、東洋医学の知識と技術を学び、三年間の課程を終了の後、鍼師、灸師、あんま・指圧・マッサージ師という、三つの資格を取得することができました。

晴れて鍼灸師となって、これから、どんどん実戦で経験を積み、早く一人前の治療

家になりたいと願う気持ちはもちろんあったのですが、ふと、その時の自分の状況を考えると、自分は様々な意味で、とても自由であることに気づきました。こんな自由な時間は、一生のうちにそんなにあることではないのでは…何か今しか出来ないことにチャレンジしてみよう。…と思い始めた半年後には、カナダのトロントで鍼灸・指圧の仕事に就いていました。



トロントでは、一年と三ヶ月程生活をしました。まったく違った環境の中での生活は、新鮮で面白いこともたくさんありましたが、私にとっては、たいへんな面も多い十五ヶ月でした。

実際、どこで生活するにしても、働いて生活していくというのは、それなりに大変さを伴うことであると思いますし、その上に自分の不十分な語学力からくるストレスもありました。さらに、私は、学校を卒業したての新前の鍼灸師であり、自分の技術への自信は、吹けば飛ぶようなものでしかなく、治療の参考にする本などもなかなか手に入らなかったり、アドバイスを受ける相手も少なかったりで、悩むことしばしばでした。なかなか、症状の改善しない患者さんなどは、もう治療に来て欲しくないとしたりもして……。患者さんと、向いあっていくことを避けて、逃げていたこともありました。

しかし、そもそも、病は治療する人間が治すものではなく、その人自身の持つ治癒力によって治るのであって、治療者が出来ることは、その治癒力を高める手伝いにすぎない…とは、良く言われる事であり、私自身患者さんに対しても、そのように説明してきたことも幾度もあるのに、患者が良くなってきたのは自分の手柄、良くならないのは自分の失敗のように思うのは、何とも、おごった話です。

東洋医学は「病を診るな、人を診よ」といわれ、私も努めて、腹診や脈診などによる診断や、手足など末端部の状態を診るなどして痛みや苦痛のある部分だけでなく、全体をとらえて、治療しようとしてきたつもりでした。しかし結局は治療する人間が逃げ腰では、治っていく方向への良い変化をおこすために必要な、患者さんとの信頼関係が生まれるはずもなく、「人を診る」ことなど、できていない訳です。

この症状には、どのように治療していくかとか、この痛みをどのように取るかという、技術向上も自分には、まだまだ大切なことですが、それよりも、自分のもとにやって来た人とどう対していくか、どのように接していくかという、もっと基本のことが、自分にはわかっていないということを知りました。そんな、日本に帰ってから勉強し直すことを知ったことが、カナダでの外国人労働者生活で得た一番大きいものだった

のかもしれない。

そんな訳で、私の（私の師匠の言葉を借りて言えば）「癒しの手」づくりは、まだ始まったばかりでございます。しかし、鍼灸界のある名人といわれる先生は、九十歳を越えられて、今も尚、現役で治療をされているということ。私には、九十歳までは、あと六十年程ありますし……まあ、まさか、自分が九十まで仕事をしているとは思いませんが、七十歳くらいになって「四十年間治療しているけれど……」なんていうフレーズを言えたら、カッコイイだろうなあと、あこがれます。

ほんの髪の毛程度の太さの鍼で、少し刺激しただけで、また、米粒の半分の大きさもない灸をひとつすえただけで、痛みがスッと消えたり、コリがスッとゆるんだり、ほんのわずかな刺激で、良い変化をどんどんおこしていく身体もあれば、あれをやっても、これをやっても、なかなか、良い変化の出づらな身体もあります。そんな、がんな身体であっても、生きている身体です。刺激に対してそれが自覚や他覚にのぼる程大きいものではなくても、必ず何か変化をおこしているはず。わずかずつの、小さな変化を見つめながら、その身体にあきらめずに、しつこく、付き合っていく執念を持ちたいと思います。

人は治るように出来ているのですから。

## “ナティヴィティー”

### 木彫り クリスマス 人形セット販売



私たちの活動地フィリピン山岳地帯に住むイフガオ族の人々によって彫られたものを、あぶらむで仕上げたものです。心暖まるクリスマスの一時にお飾り下さい。

	オイルフィニッシュ仕上げ	摺漆仕上げ
小 (16cm)	19,000	28,000
大 (21cm)	24,000	36,000

送料別 (約750円)

## 1993年度あぶらむの会総会報告

去る3月20日(土)、実践教育活動あぶらむの会1993年度総会が東京目黒にある聖パウロ教会で開かれました。

当日は、あぶらむの会の代表の大郷さんはもちろんのこと、奥様の育さん、長女の舞ちゃん、次男の耕輔君、次女の友ちゃん、そして昨年の4月から働いている富田桂さんも元気な顔を見せてくれました。

当日は、お忙しい中、50名近い会員の方々が出席して下さいました。

初めに、大郷さんより、スライドを利用し1992年度の活動報告とあぶらむの里の様子を紹介がありました。昨年1年間であぶらむの宿の延べ宿泊者が1000人を越えたこと、地元の福祉協議会の方々や教会の方々の研修会での利用が増えてきていること、田んぼを6反、畑を3枚耕していること、5つの教会から木工の注文があったことなどが報告されました。

つづいて、1992年度の決算報告がなされました。総事業費は19,178,315円でした。内訳の概要は以下の通りです。

### 〈収入〉

寄付	1,058,530円
会費入金	2,971,000円
後援会より	2,000,000円
前年度繰越金	2,364,958円
宿泊研修	7,230,900円
木工	2,037,590円
その他	1,515,337円 (講演会、農業、バザー他)

### 〈支出〉

仕入れ(宿)	1,962,646円
仕入れ(木工)	762,582円
あぶらむ在住者生活費	2,500,000円
借金返済の預金	5,500,000円 (あぶらむ債返済に向けて)
備品(車関係)	920,000円
スタッフ給料	370,000円 (富田さんへの給料)
光熱水その他	5,338,237円 (光熱水費、通信費、修繕費他)
次年度繰越金	1,824,850円

次に、1993年度活動予定が紹介されました。黙想会やT Aセミナー、ネパール研修

旅行、ウルトラマラソンなどのプログラム、農業は田んぼを10反歩に拡大、里作りはスタッフハウスの増改築、そして木工（すでに4つの教会から注文がきている）などが予定されています。そして、1993年度スタッフとして大郷夫妻以外に、富田桂さんが昨年に続き今年も、また新たに谷市三さんと1年間ボランティアの岩田篤史さんが加わるとの報告がありました。

以上の報告を受け質疑応答に入りました。参加者からは、大郷さんはじめスタッフの方々への手当てを増額すべきだとの意見が数多く出されました。これに対し、大郷さんからは宿や木工の収入をもっと増やしていきたいとの発言がありましたが、会員からはもっと会員一人ひとりが会員を増やし、会費収入を増やす努力をすべきだとの意見が出されました。

最後に、大郷さんを支える役員候補の方々の紹介があり、承認いただきました。役員に決まった方々は以下の通りです。（敬称は略させていただきます）

八代 崇（日本聖公会北関東教区主教、立教学院院長）

河野 裕道（日本聖公会東京教区司祭）

甲藤 善彦（立教大学職員）

大下 大圓（飛騨千光寺住職）

中村 正實（中村税務会計事務所）

山田 益男（通産省特許庁技官）

西田 邦昭（立教大学職員）

新倉 俊吾（日本航空）

鵜川 久（三菱電気）

鵜川 貴子（トーハン）

深野 毅（立教大学職員）

下田 由香

## バザー献品のお願い

あぶらむの活動、建設資金づくりのため、毎月我楽多市やバザーに参加しています。

献品いただけるものがあればご協力下さいませ。

献品物の内容は問いません。よろしくお願い致します。



総会の時点で正会員が281名（法人会員4団体含む）でした。本来であれば、総会の運営は会の定款に定められた定足数や議決数などに則り行われるものですが、まだそうした運営面での整備ができていません。そこで、今年度は出席された会員の方に報告了承という形をとらせていただきました。今後、会の発展に伴って、会の運営も整備していきたいと考えています。

総会終了後、有志の方々が作って下さったカレーと大郷さんが飛驒の地から持って来られた地酒でささやかな懇親会を持ちました。

初めての総会ということで不手際も多くあり、出席された方々に大変ご迷惑をおかけいたしました。あぶらむの会の活動を直接知っていただくため、またより良い運営ができるようご意見、ご批判をいただくために、これからも毎年総会を開催していきます。今後とも、多くの会員の方々のご出席を期待しております。（文責 西田）

## 事務局だより

日頃、“あぶらむの里建設募金”にご協力いただきありがとうございます。

昨年6月に会員の募集を開始して以来、現在までに正会員は339人の方々からご応募がありました。また、賛助会員は127人の方々からご応募がありました。誠にありがとうございました。

会員の募集は引き続き行っておりますので、よろしく願いいたします。振込用紙に「正会員申込み」または「賛助会員申込み」とお書きのうえ、今年度の会費をお振り込み下さい。

会員の方で会費未納の方もよろしくおねがいたします。

なお、“あぶらむの里建設募金”も引き続き行っておりますので、よろしくおねがいたします。

会費および募金の振り込み口座は次の通りです。

郵便振替 名古屋0-88065 あぶらむの会

正会員申込み者（9月20日現在・敬称略）

荒木讓 諫山禎一郎 萩野登 太田精一 太田勝博 奥平清昭 奥平緑 鏑木静 河合靖峯 鬼本博文 岸元忠義 岸元静江 黒木一郎 窪田希世子 小林哲夫 沢田京子 崎長恭子 沢田耕作 篠原陽子 芝有香 鈴木洋子 菅原辰男 高橋保 武原春

美 谷祐一郎 田村由紀子 中川聡 西川照子 野田修治 福原久美 堀田利子 堀  
江友子 丸山恒 松田捷朗 宮本由美 宮崎誠也 宮川すみれ 宗像千代子 森本晴  
生 森田迪子 山梨英夫 安田英夫 山口真代 山本淑子 八木洋子 山本良樹 渡  
辺多茂夫 炭竈英子 メディア・プランニング 仙田典子 鈴木聡子 八巻秀彦 田  
村卓 高野和子

**賛助会員申込み者**（9月20日現在・敬称略）

赤井充也 池田寿美子 岩下ひさ 江藤智子 尾崎裕子 加福もとゑ 神島洋二 菊  
地周子 木村信二 柴崎妙子 知念ハル 徳田その 桃原松五郎 財団法人富山YM  
CA 永井一恵 永田ナヘ 畑井正春 藤田和久 増田利雄 又吉亀次 松崎仁 宮  
城タケ 水谷裕

**募金申込み者**（9月20日現在・敬称略）

尾針恵子 宮崎秀貴 保坂正三 佐伯道夫 聖公会下町グループ 石原志乃 神崎雄  
二 富山マリア教会婦人会 鶴川久・貴子 愛楽園訪問団一行 荒屋光夫 進藤淑子  
大八木米子 岸井孝司・ミツ子 澤田耕作 新見仁 鶴川雅行 佐藤恵子 片町勝朗  
中村聖子 嶋ひとみ 黒木一郎・誠子 澤田甚一 細井民二 沢越良子 萩原久子  
中村洋 東京聖パウロ教会 国見登 熊谷一綱 祈りの家教会 堀江あつみ 三谷誠  
一 木田献一 原川恭一 関田寛雄 和田八束 小笠原スワ 篠宮慶次 畑井正春  
沢田京子 藤田寛治 三村正次 尾崎嘉代子 久田広子 松岡和夫 斎藤孝 立教高  
校第42回SPF実行委員会 細川哲士 越田信 ショーテック・ホームサプライ 小  
野健一 渡辺多茂夫 鈴木康仁 山口千尋 藤倉待子 内間安仁 竹内寛 大久保茂  
之 金子玲子 トピック 瀬川信子 杉山千鶴子 三根則子 菊地栄三 高島通敏  
松岡秀子 永井一恵

## フォーラム「環境と生命」'93

昨年立教大学で開催しましたフォーラムを今年も11月28日（日）10：00より  
同大学で開催することになりました。

今年のテーマは「今、人間と自然との共生を問う」。講師は「星寛治氏」（山  
形県高島町、農民詩人で有機農業を实践）と「チカupp美恵子氏」（北海道、  
アイヌ民族文様・刺繍家）。

奮ってご参加下さい。

問い合わせ先 西田、田村（立教大学学生部）03-3985-2439